

## 日本天文学会 早川幸男基金による渡航報告書 *Astronomical Telescopes and Instrumentation*

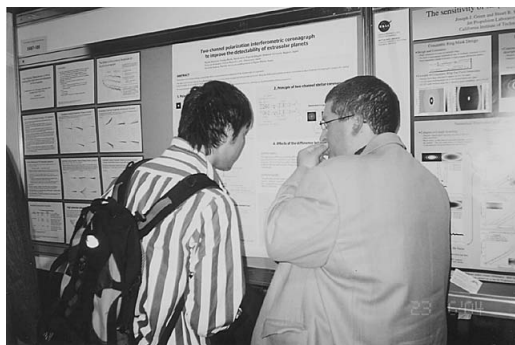
渡航先—イギリス

期 間—2004年6月20日～27日

2004年6月21日から25日までの5日間、英国グラスゴーにおいて開催された国際学会、*Astronomical Telescopes and Instrumentation* に参加しました。EURO2004の開催期間ということもあり、街角のパブからは、ビール片手にサッカー観戦している人々の歓声が聞こえたりすることもしばしばあり、とても良い雰囲気でした。

本学会では、スペース望遠鏡、地上望遠鏡、補償光学、天体干渉計など、観測装置に関する15のセッションに分かれ、口頭・ポスター発表が行われました。私は、「Two-channel polarization interferometric coronagraph to improve the detectability of extrasolar planets」というタイトルでポスター発表を行いました。私たちの研究グループではこれまで、独自のコロナグラフ装置を提案し、その開発を行ってきました。本発表では、太陽系外惑星からの光が部分偏光していることに着目して、検出感度をさらに向上させる手法を新たに提案し、その性能評価の実験結果を報告しました。

ドップラー法による系外惑星の発見ラッシュに伴い、系外惑星光の直接検出を目的とした装置の開発が、急速な発展を遂げています。現在、NASAのTPF計画や、ESAのDarwin計画などのスペース計画をはじめ、多くのプロジェクトが進行中です。私は主に、TPF/Darwin計画関連のセッションに参加しましたが、その講演数の多さと講演に対する活発な質疑応答などから、非常にホットな研究分野であることを実感することができました。特にTPF-C(コロナグラフ)計画関連では、実際にプロトタイプを作製し、系外惑星検



ポスターセッションにおける議論の様子。左が著者。

出のための十分な性能を実験室レベルで達成した、という講演がいくつかあり、実際の観測がよいよ現実味を帯びてきた、という印象を受けました。

ポスターセッションでは拙い英語のためたいへんもどかしい思いをしましたが、私の行っている研究を広く知ってもらえたのだと思います。また他の研究グループの発表としては、惑星光の偏光成分をとらえるための高精度な偏光観測装置の開発など、興味深い発表も数多くありました。惑星光の偏光に着目したという点で、私の研究とも非常に関連しており興味深かったのですが、残念ながら著者の方とお会いする機会が得られず、少し心残りでした。

大きな国際学会に参加することは、世界の動向を探り、視野を広げることができるだけでなく、自分の行っている研究を世界にアピールできる貴重な場であることを強く実感しました。最後になりましたが、今回渡航費を援助していただきました。早川幸男基金に深くお礼申し上げます。

村上尚史(北海道大学)